板書例

1 第一段

最初に小説の背景と登場人物

	1	2	3	4	5
	時代	時刻	場所	季節	都の様子
説明	平安時代末期 （旧記より養和大飢饉一一八一年）	ある日の暮れ方 （明暗の視点→色彩）	京の都の羅生門（南端門）	晩秋 理由（きりぎりすと夕冷え火桶）	下人のほか誰もいない羅生門 なぜか？ 都 ⇦ 地震　辻風　火事　飢饉 結果　さびれ方は異常 （旧記より＝方丈記） 狐狸・盗人が棲む 死人（しにん）の遺棄

6

登場人物と生物

①下人…どんな人物か？　（主従関係の下）
他の人物はなし　主人に仕える下働きの人間

②きりぎりす（色彩と効果）

色彩
- 丹の円柱 ― きりぎりす
- 赤
- 緑〈秋〉

効果
- ・寂しさ
- ・唯一の有機物
- ・時間

※こおろぎ（茶）晩秋

③鴉（からす）（形象）
鴉が夕焼けの中
死人の肉をついばむ
⇦ 今日　長い草の石段の上　白い糞

項目	色	イメージ
鴉	黒	不吉 死
夕焼け	赤	血
死人の肉	赤	

緑 ↑ 対比 ↓ 白

展開（下人の外見→立体的描写→葛藤）

（1）下人（外見と心情）

外見
① 洗いざらし
- 紺の襖 ― 大きなにきび
- 清涼感 ― 青色でクローズアップ

イメージ（色）

心情
② 赤色の強調
- ・若い思春期の男
- ・悩み多い心

平安時代のサンチマンタリスム→下人の現代人的感傷癖

（2）作者はさっき「下人が雨やみを待っていた。」
作者の登場「語り」で立体的描写
謎 作者まで自由に操る「芥川」は超越者なのか？
雨やみを待つ本当の理由は？

状況の由 表理	主人に四、五日前に暇を出された（都の衰微で、失業）
真の理由	雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた

（3）下人の二つ（Ⓐ と Ⓑ）の葛藤
どうにもならないこと 明日の暮らし どうにかするため
手段を選んでいる暇はない

Ⓐ選んでいれば	結果：飢え死に（そうして）犬のように遺棄
Ⓑ選ばないとすれば	すれば　同じ道を低回したあげく この局所へ逢着（「すれば」の片をつける） 結局（　局）⇩盗人になる

下人　大きなくさめ　立ち上がった（行動の起点）
丹塗りの柱のきりぎりすも消えた（時間経過）
夜を明かすため羅生門の二階へ上がる

2 第四段 下人の変化

本文	背景
太刀を押さえ冷然	老婆を威圧しながらも、冷静・冷酷な心で対応
大きなにきびを気にして	老婆の話に共感するのではなく、違う視点（悪の実践）へ向かうきっかけ

変化

転換点①
しかし
下人にある勇気の喚起

門の下	2つの勇気
前の状況（前の勇気）	門の下で飢え死にか盗人かで迷う	老婆を捕えた勇気 あらゆる悪への反感 悪を憎む心 正義感 ＝ 勇気
ある（新）勇気の発生	Ⓐ門の下で下人に欠けていた勇気	Ⓑ老婆を捕えた勇気（正義感）とは反対
結局	盗人を積極的に肯定する 勇気	

転換点②
きっとそうか
嘲るような声で念を押した

問
⇦ どうしてか？

下人の内情	
老婆の悪の論理の実践を下人が老婆に対して行った場合、その本人が最初の被害者となる皮肉から	嘲るような声（皮肉）
悪の論理は生きるために許されることの再確認 同時 老婆自身がその被害者となることへの同意	念を押した（確認）

転換点③
では
不意に右手をにきびから離して↓初めて利き手が解放

問
⇦ にきびの象徴とは？【悪の実践の起点】

象徴	
①	悪の実践を束縛している正義感という障害（への象徴）
②	若さ・サンチマンタリスム・ストレスなどの心理的性癖（という象徴）

最後図でまとめると

京の都（羅生門外部）

羅生門の内部
老婆･･･死人（しびと）の毛を抜く
女･･･蛇を干し魚として売る

非日常的次元
死人（しびと）世界
生存の論理
⇨
生きるための全てが許される世界
＝
悪の論理

老婆

日常
京の都
死人（しにん）
白髪を逆さにのぞき込む
急なはしご

下人
下人の行方は誰も知らない
（どう地獄を生きるのか？）

夜の底
奈落の底＝地獄
黒洞々たる夜
暗黒の「無明の闇」
救済なし我欲・我執の支配
「無明の闇」無秩序・悪の支配